

神の知性

—スピノザ『エチカ』における「有限様態」の問題—

柴 田 健 志

はじめに

『エチカ』は人間の生に関する哲学である。この哲学の最大の特徴のひとつは、人間という存在を「有限様態」として理解した点にある。「有限様態」とは「実体（神）」という無限な存在が変容したものであるとされている。ところが、この論理は明らかに矛盾している。無限は有限にならないからである。しかし、「有限様態」の存在を認めないということはできない。なぜなら「有限様態」すなわち人間は現実に存在しているからである。

この問題に関するスピノザの解は『エチカ』第一部定理28で示されている。「実体」はたんなる「有限様態」に変容するのではなく、「有限様態」の無限の連鎖へと変容しているというのである。この論理を検討しなければならない。ちなみにスピノザの決定論といわれるのはこの論理である。

意外にも、この定理の理解は個物の存在に関するスピノザ独自の思想である「直観知」の理解に直結している。この点には論文の最後で言及しよう。さしあたり問わなければならないのは次の点である。「有限様態」

の無限の連鎖とはいったい何であろうか。どうして「実体」がそんなふうに変容しなければならないのであろうか。——私の解釈によれば、「有限様態」の無限の連鎖とは「実体」つまり「神」の思考過程にはかならない。言い換えれば、「神の知性」が「有限様態」の無限の連鎖という形態をとって展開しているのである。したがって、問われなければならぬことは、どうしてそのような思考過程が生じると考えられるのかということである。この問いかけに答えることによって定理28の意味は鮮明に認識されるであろう。

1 有限様態の問題

スピノザが「有限様態」の問題を定理28でどのように処理しているかを見ておかねばならない。この問題はじつは定理21から始まっている。定理21では「神の絶対的本性」から有限な存在は帰結しないことが証明されている。ところが、定理28の証明では「実体」が有限な「様態」に変容するという点が認められている。すると、定理28の証明は定理21の証明に矛盾しているように見える。しかし、定理28はむしろこの問題を解決しようとしているのである。というのも、定理28の証明は「神の絶対的本性」からは有限な存在が帰結しないという定理21の証明を前提した上で、どの有限な存在も他の有限な存在に変容した限りにおける「実体」によって存在および作用に決定されており、その決定の連鎖が「無限に進む」と説明されているからである。つまり、「実体」が単独の「有限様態」に変容することはできないが、「有限様態」の無

限の連鎖へと変容することはできるといのである。以上をテキストで確認しよう。まず定理21である。

「神の何らかの属性の絶対的本性から帰結するすべてのものは、つねにかつ無限に現実存在しなければならぬ、つまりその属性によって永遠かつ無限である」(1/21/P)。

次に定理28。

「あらゆる個物すなわち有限でかつ限定された現実存在を持つおのおのの事物は、同様に有限でかつ限定された現実存在を持つ他の原因によって現実存在しかつ何ごとかをなすように決定されるのでなければ、現実存在することも何ごとかをなすように決定されることもできない。そしてこの原因もまた、有限でかつ限定された現実存在を持つ他の原因によって現実存在しかつ何ごとかをなすように決定されるのでなければ、現実存在することも何ごとかをなすように決定されることもできない。こうして無限に進む」(1/28/P)。

このように、「有限様態」が決定の連鎖のなかで存在しているということが定理28で証明されるべきことである。証明によれば、このような決定の連鎖を形づくる個々の「様態」はすべて「神」の変容にほかならない。逆からいえば、「神」が有限な「様態」に変容するには、無限の連鎖という形態をとらなければならないのである⁽¹⁾。

ところで、このような無限の連鎖が「必然的」(1/29/P)なものであ

るとどうしていえるのであろうか。「有限様態」は別の仕方でも連鎖することもできたと考えることはできないのであろうか。現実には知覚される世界はスピノザのいう「有限様態」すなわち個物の偶然的な相互作用から成り立っているようにみえるがゆえに、この問いかけには強烈なリアリティを感じ取られる。しかし、それは見かけだけである。というものの、定理28において問題になっているのは、すでに存在する諸事物のあいだの関係ではなく、諸事物が存在することそれ自体だからである。『エチカ』第一部における「決定」の概念は、すでに存在するものを「決定」することではなく、それまで存在しなかったものを存在することへと「決定」することを意味するのである。したがって現実に知覚される世界の説明として定理28を理解しようとすることはまったくの誤りであると考えて差し支えない。解釈を先に進めるには、まずこの点から見直していく必要がある。

2 抽象的存在モデル

『エチカ』第一部は現実に知覚される世界を何ら指示しない抽象的存在モデルとして構築されている。『エチカ』第一部が提示する存在論は、無限の「属性」をもつ唯一の「実体」すなわち「神」およびその「変容」である「様態」以外には何も存在しないものである。しかし、この存在論は現実に知覚される世界を指示していないのである。実際、「属性」にはいったいどんな種類があるのかという点がここではまだ明らかにされていない。「思惟」と「延長」という二種類の「属性」が言及さ

れるのは『エチカ』第二部になってからである。しかも、第二部はこれら二種類の「属性」を導入することによって始まっているという点に注目すべきである。

「思惟は神の属性である、すなわち神は思惟するものである」(2/1/P)。
「延長は神の属性である、すなわち神は延長したものである」(2/2/P)。

これらの定理によって「属性」という概念は意味論的な次元をもつことになり、抽象的存在モデルが現実には知覚される世界に結びつけられるのである。それまでは「属性」はたんなる概念にすぎない。そうであるとするれば、『エチカ』第一部で言及される「有限様態」を何か現実には知覚しうる対象として考えることはできない。例えば、それは物的対象ではない。それゆえ、定理28で言及される「有限様態」の無限連鎖を自然法則に従う物体の作用の連鎖として考えるべきではない⁽²⁾。むしろ、『エチカ』第一部のねらいは、あらゆる「様態」が「実体」の「変容」であるという存在論を、現実的な指示をもたない概念の次元で証明することにあると考えるなければならないのである。

「様態」が「実体」の「変容」であるということは、「様態」が「実体」から産出されているということの意味している。したがって、この産出の論理を理解することが『エチカ』第一部を理解することであるといっても過言ではない。その際、具体的にはいったい何が産出されるのかと問うことは意味をなさない。産出の論理はもっぱら概念の次元で理解されなければならないのである。

この論点は定義論という側面からも指摘することができる。『エチカ』

第一部の冒頭では、「実体」「属性」「様態」が次々に定義されている。

「実体ということ、それ自身のうちにありかつそれ自身によって概念されるものと解する」(1/3/D)。

「属性ということ、実体についてその本質を構成していると知性が知覚するものと解する」(1/4/D)。

「様態ということ、実体の変容すなわち他のもののうちにありかつ他のものによって概念されるものと解する」(1/5/D)。

きわめて形式的な定義である。これらが現実には知覚される対象を指示しているとは到底考えられない。実際、もしそうであれば、「〜と解する」というかわりに「〜である」といわなければならないであろう。また、スピノザ自身が書簡9で述べているように、定義には「知性の外にある」とおりに事物を説明する「タイプのものだけでなく、「我々によって概念されるあるいは概念されうるとおりに事物を説明する」タイプのものがある。スピノザによれば、前者は「真」でなければならないが、後者が「真という観点の下に」考えられる必要はない⁽³⁾。

前者が対象の指示を含む定義であるのに対して、後者はそうではない。つまりスピノザは、定義がたんに形式的なものでありうるということを確認しているわけである。では、『エチカ』第一部における「実体」「属性」「様態」の定義が後者のタイプの定義であったとしたら、いったいどのようなのであろうか⁽⁴⁾。いうまでもなく、これらの概念によって構築される存在論が現実には知覚される世界との意味論的な結びつきをもたないということになるであろう。したがって、「実体」の「変容」という産出の

論理は現実を知覚される世界を参照せずに理解されなければならないのである。では、それをいったいどんなふうに理解すべきなのであろうか。

3 無限知性

この産出の過程が必然性の概念でとらえられているという点に注目しよう。

「神の本性の必然性から無限に多くのものが無限に多くの仕方で帰結しなければならぬ」(I/16/P)。

注目しなければならない点は、スピノザのいう必然性とは数学的な必然性であるという点である。

「神の至高の力あるいはその無限の本性から、無限に多くのものが無限に多くの仕方で、言い換えればあらゆるものが、必然的に流出したことがあるいはつねに同一の必然性によって帰結すること、またそれは三角形の本性からその三つの角が二直角に等しいことが永遠から永遠に帰結するのと同じ仕方においてであること、これらのことを私は十分明瞭に示したと思う」(I/17/S)。

三角形の本性からその内角の和が二直角に等しいということが帰結するように、神からは「無限に多くのもの」が「帰結する (sequi)」という

のである。このように、数学的な必然性の概念が存在論に適用されることによって、スピノザの哲学に固有の因果性の概念をもたらしているという点が重要である。

三角形の本質という原因に対し、その幾何学的な性質が結果としてとらえられる。この意味において、原因は結果に対して内在的であって、機械論的な原因のように外在的なものではない。ということは、定理28の主題である「有限様態」の連鎖も物的対象における機械論的な決定の連鎖として理解されるはならないのである⁽⁵⁾。むしろ次の点を鮮明に認識しなければならない。

「実体」から「様態」が帰結する産出の過程が数学モデルで理解されているということは、この過程が意味論的な次元をもたない純粋な思考過程として理解されているということの意味している。実際、数学的な因果性は一種の思考過程として理解するほかないであろう。『エチカ』第一部において神の「無限知性」が言及されるのはそのためであると考えられる。つまり、数学的な必然性にしたがって「実体」から「様態」が産出される過程は、「無限知性」の認識作用として理解されているのである。この点は定理16のテキストから明らかである。上記の引用ではあえて省略した部分を補って、もういちど同じテキストを引用しよう。

「神の本性の必然性から無限に多くのものが（すなわち無限知性の下に生じうる (cadere possunt) すべしものが）無限に多くの仕方で帰結しなければならぬ」(I/16/P)。

この定理が意味しているのは、諸事物が「無限知性」によって生み出

されているということにはかならない。『エチカ』の存在論においては、原因と結果という関係は思考によって生み出される関係なのである。この点が決定的と主張されているテキストを引用しよう。『エチカ』第一部定理17の注解である。

「神の知性は、それが神の本質を構成していると概念される限りにおいて、真に諸事物の現実存在および本質の原因である」(1/17S)。

以上を踏まえれば、定理28の「有限様態」の連鎖を「無限知性」の思考過程として理解することができる。この視点から見直してみると、定理28の証明のポイントは、「神」の思考が「有限様態」の無限の連鎖という形態をとって展開するという点にあることになる。ではなぜそうでなければならないのか。これが問わねばならない点である。

ただし、スピノザは「有限様態」が存在するという事実を説明するために「神」が「有限様態」の無限の連鎖へと変容していると考えているのではない。そのような事実への指示を含まない存在論を構築しているのである。それゆえむしろ「神」の思考の展開それ自体が「有限様態」の無限の連鎖という形態をとるのはなぜかを問題にしなければならないのである。

4 数学的思考

上記の解釈を展開するにあたっての焦点は予測不可能性である。神の

思考過程が言及される限りで『エチカ』第二部のテキストも参照して考えると、「神」の思考過程は「観念」の連鎖として理解することができる。「神」のなかには神の本質および神の本質から必然的に帰結するすべての「神の観念が与えられる」(2/37P)。「観念」とは思惟の「様態」である。したがって「有限様態」の無限の連鎖とは「観念」の無限の連鎖として考えられなければならない。実際、次の定理では「無限に多くのものを無限に多くの仕方で帰結する神の観念は単一でしかありえない」(2/47P)といわれている。「神の観念」が「無限に多くの」観念となって連鎖していくことが「神」の思考過程そのものである。

問題はこの連鎖をどのように理解するかである。数学的な認識の本性についてはカントによる分析的／総合的の区別がある。しかし、『エチカ』における「神」の思考過程はこのどちらにもあてはまらない。それをここでは自律的と呼ぶことにしよう(理由は後に述べる)。この三つを『エチカ』の用語法で表現すると次のようになる。

- (イ) 分析的・あらゆる「観念」は「神の観念」に含まれている
- (ロ) 総合的・あらゆる「観念」は「神の観念」に含まれていない
- (ハ) 自律的・あらゆる「観念」は「神の観念」から「帰結する」

私の考えでは、「神」の思考過程は(ハ)にあたる。「帰結する(sequi)」という言葉はスピノザ自身の用語だが、それは論理的な帰結とは異なる独特の意味をもっているのである。私の考えによれば、それを予測不可能な帰結関係という意味に解することができる。しかし、この点を主張する前に、(イ)および(ロ)の可能性を『エチカ』のテキストによつ

て否定しておかねばならない。

(イ)の理解によれば、「無限知性」が思考するあらゆる「観念」は現実に思考される以前から「神」のなかにあつたことになる。つまり何らかの仕方でも認識されていたことになる。「無限知性」はそれを明示しているにすぎない。このような理解はテキストによって端的に否定される。『エチカ』第一部定理17の注解において「神の知性」はそれが思考する対象よりも後あるいは同時にあることはできないという点がはっきりと主張されているからである。

「もし知性が神の本性に属するとすれば、それはわれわれの知性とは異なり、知性によって把握される諸事物よりも後にあつたり（多くの人が同意しているように）、あるいはそれらと同時にあつたりすることは本性からしてできないであろう。というもの、因果関係からして神はすべての事物の前にあるからである。反対に、真理および諸事物の形相の本質は、それが神の知性のなかに観念としてそのように存在するがゆえに、そのようなものとして存在するのである」(17/S)。

「神の知性」と「事物」の関係が述べられたテキストである。「神の知性」が「事物」をいかにして認識するのかという点が問題になっている。テキストから読みとることができるのは、「神の知性」は「事物」の原因であるがゆえに「事物」の前になければならないという主張である。つまり、「神」が思考することによって、それらの「事物」ははじめに存在するというのである。ただし、テキストにあるように「事物」とは「観念」のことにほかならない。以上から、「神」の思考過程を分析的な

ものとして理解する可能性が否定できる。

(ロ)の理解によれば、「事物」の「観念」はもともと「神の知性」のなかにはなかった。この点だけみれば上記のテキストには反していない。しかし、認識が総合的であるということをもカントの意味で理解すれば、この理解もまた明確に否定しうるのである。

カントによれば、たんなる「概念」のみによって認識する限り、もともとそのなかに含まれていたものしか認識することができない。それが分析的な認識である。そこで、知識を拡張するには「概念」とは異なる次元が導入されなければならない。いうまでもなく「直観」である。経験的な認識が「直観」を含むのは当然である。しかしカントは数学的認識においても時間および空間についての純粹な「直観」が機能していると考えた⁶⁾。こうして「概念」に意味論的な次元を導入することによって、数学的認識がたんなる分析命題でなく知識として成立することを基礎づけようとしたのである。

では、スピノザの「神」の思考過程は総合的であろうか。これまでの考察によって、その可能性はすでに否定されていると考えられる。というものの、『エチカ』第一部で展開されている存在論は、現実に知覚される(「直観」に与えられる)世界との意味論的な結びつきをもたないと考えられるからである。「実体」すなわち「神」の思考過程とは、純粹に概念(『エチカ』の用語法では「観念」)のみによる過程なのである。ただし、この点はテキストにもとづいて具体的に論じ直すこともできる。神の思考過程が言及される限りで『エチカ』第二部のテキストも参照して考えるという方針にしたがって、その定理5を参照しよう。この定理では、「神」の「属性」である「思惟」と「延長」が相互に独立して

いるという点を踏まえ（この点はすでに第一部定理5において抽象的に証明されている）、「思惟」の「属性」における「観念」の連鎖が「延長」の「属性」への指示を含まずに展開されていることが証明されている。

「観念の形相的存在 (esse formale) は神がただ思惟するものと考えられる限りにおいて神を原因として認めるが、神が他の属性において説明される限りにおいては神を原因とは認めない。すなわち、神の諸属性の観念および諸個物の観念は、観念されたもの自体あるいは知覚された事物を作用原因として認めず、神が思惟するものである限りにおいて神を原因と認める」(2/5/P)。

事物の「観念」の原因は「神」である。しかし、「神」はただ思考することによってのみその事物の「観念」を生み出すのであって、その事物を知覚しているのではない。「神の知性」は知性の外に存在するものとはまったく独立に「観念」を生み出すのである。「神の観念」から「無限に多くのもの」が帰結するために、「直観」は不要なのである。

以上のように、「神」の思考過程は(イ)分析的なものとしても理解できないし、(ロ)総合的なものとしても理解できない。すなわち、「神の知性」は「無限に多くのもの」の「観念」を思考しているが、それらの「観念」は「無限知性」が思考する以前には存在せず、しかも「神の知性」の外にある対象を知覚することでそのような「観念」がもたらされているというわけでもない。すると、いったいどういうことになるのであろうか。「無限知性」はまったく自律的な仕方で新しい「観念」を生み出し続けているということになる。それが(ハ)自律的という理

解の意味である。スピノザはそれを「帰結する(sequi)」という言葉で言い表す^⑦。「無限知性」によって思考される「観念」の原因は現実の思考過程以前には存在せず、また思考過程の外にも存在しない。ということは、それが思考されるまでは「神」にさえ予測不可能であるということになる。現実的な指示をもたない概念の次元で存在論を構築することが要求された理由はここにある。では、ここからいったい何が主張するのであろうか。

5 予測不可能性

「神」の思考が予測不可能なものであるがゆえに、それが展開するには「有限様態」の無限の連鎖という形態をとらざるをえないというのが私の主張である。この主張の前半部分すなわち「神」の思考の予測不可能性についての考察を終えたので、その後半部分に取りかからなければならぬ。予測不可能性はいったいどうして「有限様態」の無限連鎖を要求するのであろうか。

この問題を次のように言い換えてみよう。「有限様態」すなわち個物の「観念」はあらかじめ「神の観念」のなかに含まれているわけではない。しかしそれは「神の観念」からしか出てこない。このパラドクシカルな事態をどのように考えるべきであろうか。おそらくこの問いに「有限様態」の問題を解く鍵がある。参照すべきテキストは『エチカ』第二部定理8および注解である。

「現実存在しない個物すなわち様態の観念は、個物すなわち様態の形相の本質が神の属性のなかに含まれている (continentur) ように、神の無限の観念のなかに包含されて (comprehendi) いなければならぬ」(2/8/P)。

この定理が証明しようとしていることは、まだ現実に存在していない個物の「観念」が「神の無限の観念」のなかに「包含」されているという点である。すると、個物の「観念」はあらかじめ「神の観念」のなかに与えられているわけではないというこれまでの解釈は、この定理とあからさまに矛盾することになる。この矛盾を解くには注解を参照しなければならぬ。注解の内容をまとめてみると、そこにはおおよそ次のようなことが述べられている。円のなかに相互に交わる二本の線分を引くことができ、かつそれらが等しい割合で分割されるような点で交わるようにすることができる。その場合、分割された各々の線分を一辺とする「矩形 (rectangula)」の面積は二本の線分で等しくなるであろう。こういう線分は無数に存在している。しかし、それらの存在は円の観念のなかに「包含」されている (comprehenditur) 限りでのみ考えられるにすぎない。しかし、それら無数の線分の観念は現実に作図された線分の観念とは異なる。

以上が現実に存在しない個物の観念が神の観念のなかに「包含」されていることの説明にほかならない。この注解から示唆されることは、「神の観念」のなかに「包含」されている「観念」と現実に思考された「観念」とは存在の仕方が異なるという点である。

「神」の思考過程が分析的であるためには、現実に思考されている「観

念」がはじめから「神の観念」のなかにあるのでなければならぬ。ところが「包含されている」というのはそのような意味ではないというの⁸⁾が注解の趣旨である。すなわち「包含関係は論理的帰結関係ではない」⁸⁾のである。それゆえ、この定理はこれまでの解釈とあからさまに矛盾しているわけではない。むしろ、これまでの解釈から導き出された問題点を解く鍵なのである。

「神の知性」は「無限に多くのもの」を思考しうる。言い換えると、そのような能力をもっている。しかし、現実に何が思考できるかは「神の知性」にとっても不明である。この意味で、「神」の思考過程は根本的に「予測不可能」であるとみなしうる。問題は「予測不可能」な思考がなぜ「観念」の無限の連鎖という形態を要求するのかという点であった。定理8の注解に出てくる例は、この点に対する部分的な解決となるはずである。

注解のいうように、円のなかに相互に交わる二本の線分を引くことができ、かつそれらが等しい割合で分割されるような点で交わるようにすることができる。しかし、それは作図によってはじめて思考しうることである。また、分割された各々の線分を一辺とする「矩形」の面積が二本の線分で等しくなるということを思考するには、そのような線分をまず作図しなければならぬ。こうしてある「観念」から別の「観念」に進むことによって、たんなる円の中には思考できなかった(予測不可能だった)幾何学的な性質が連鎖しはじめる。ところが、円がなければこれらを作図することはできないという意味で、これらは円に「包含」されていたと考えることができる⁹⁾。この例は、「予測不可能」な思考過程が「観念」の連鎖を要求するということを論証してはいないが、その

近似的なイメージを与えていると考えられる。すなわち、あらゆる「観念」は「神の観念」からしか出てこないという点を「包含」の概念で表した上で、「包含」されているものが展開するには、諸観念の原因と結果の連鎖を経なければならぬというイメージである。「無限知性」はこのような連鎖から成っていると考えられるのである。

6 直観知—結論にかえて—

以上が「有限様態」というスピノザ解釈上の問題点に対する私の解釈である。「予測不可能性」の概念と「無限連鎖」の概念とのつながりをとらえることが最終的な結論であるが、それを十分に掘り下げて提示できたわけではない。とりわけ、このような「観念」の連鎖がなぜ「無限に進む」と考えられるのかという点にはまったく言及することができなかった。この点は今後の課題とし、以上の解釈がスピノザ哲学のトータルな理解に寄与するという点を述べて論文を閉じることにしたい。

その事例として、「直観知」の問題を以上の結論をもとに考察しよう。『エチカ』は認識を三種類に分類している。「第一種の認識」は「表象」と呼ばれ、人間身体がその外部の対象から刺激されることによって生じた「身体の変容」を認識することによって成立する(1/19/P)。「第二種の認識」は「共通概念」と呼ばれ、人間身体と外部の物体とに共通のものを「身体の変容」のなかに認識することによって成立する(1/38/P)。最後に「第三種の認識」は「直観知」と呼ばれるが、その認識は「身体の本質を永遠の相の下に概念する」(5/29/P) ことによって成立する

ものである。このように、三種類の認識はすべて何らかの仕方で「身体」と関係している。ところが、スピノザは「直観知」とは「身体に関係しない精神の持続」(5/20/S) に関する認識であるという。このあからさまな矛盾をどのように考えればよいのであろうか。

手がかりは次の点にある。「第一種」および「第二種」の認識が「身体の変容」と関係しているのに対して、「第三種」の認識だけは「身体の本質」に関係しているのである。「身体の変容」はすでに多くの個物が現実に存在し、相互作用をおこなっていることを前提している。ところが、「身体の本質」はこれとは別の次元に設定されている。すでに部分的に引用した『エチカ』第五部定理29の全体を引用しよう。

「精神は永遠の相の下に理解するすべてのことを、身体の現在の現実存在を概念することによって理解するのではなく、身体の本質を永遠の相の下に概念することによって認識する」(5/29/P)。

身体の「現実存在」の次元と身体の「本質」の次元が明瞭に区別されている。重要な点は、それらの区別が何を意味しているかである。「現実存在」とは身体がすでに存在していると考えられる次元である。いうまでもなく、「本質」はそれに対立する。形而上学の伝統においては、「現実存在」に対立する「本質」の次元とは、まだ創造されていない可能性の次元である。しかし、この定理に含まれる「身体の本質」はそのような次元にあるのではない。なぜなら、創造以前の存在を「われわれが想起することとはありえない」(5/23/S) と明言されているからである。「想起」とは「現実存在」する身体が外部の物体から受けた「痕跡」

(2/18/S)の再生であり、それゆえ「現実存在」以前のことに「想起」などありえないと考えられるからである。

では、「現実存在」の次元とは異なる「本質」の次元とはいったいどのような次元なのであろうか。事物がすでに存在している次元ではなく、また事物がまだ存在していない次元でもないとすれば、それはいつたいいかなる次元なのであろうか。これまでの考察を踏まえれば、それは事物が今まさに存在に決定される次元であると考えることができる。実際、スピノザは次のように述べている。「我々は精神が今存在し始めたかのように、また事物を今永遠の相の下に認識し始めたかのように考察するであろう」(5/31/S)と。

このような仕方では「無限に多くのもの」の「観念」が連鎖して「無限知性」を作り上げている次元こそ「本質」の次元にほかならない。この次元で個物の存在を認識するということは、人間精神が「神」の思考過程に同一化することの意味している。「人間精神」という「観念」が他の「観念」に変容した「神の観念」から「帰結する」のを認識すること、それが「直観知」なのである。こうして「直観」によって認識する限り、人間精神は「無限知性」の思考に合一する。この点は『エチカ』第五部定理40注解で述べられている。そのテキストを以下に引用するが、そのなかに『エチカ』第一部定理28に出てくる決定の連鎖のフレーズが使われているということに注目すべきである。

「我々の精神は知的に認識する限りにおいて思惟の永遠なる様態であり、それは思惟の他の様態によって決定され、この様態もまた他の様態によって決定され、こうして無限に進み、そうやってすべてが同時に神の

永遠かつ無限なる知性を構成しているのである」(5/40/S)。

この認識が「身体の本質」にかかわるのは、「思惟」の「属性」において「神の観念」から「人間精神」が「帰結する」と平行して、「延長」の「属性」においては「人間身体」が「帰結する」と考えられるからであって、「身体」という対象が認識の原因になっているからではない。その意味でなら「身体に関係しない精神の持続」(5/20/S)という表現にも矛盾は認められないであろう。

さて、人間精神は「直観知」において「神」の思考過程に同一化しているのだとすれば、「直観知」には「神」の思考と同様に「予測不可能」という性質が認められるのでなければならぬであろう。では、果たしてそのような解釈が成立するであろうか。成立するはずである。「直観知」を説明するためにスピノザが言及している比例数の事例から、「予測不可能」であるということが「直観知」の根本的な性質であるということを読みとることができからである。

スピノザは、 $1 : 2 :: 3 : x$ という等式の x を求めるには三通りの方法があるという。「第一種の認識」は経験からの推論による。「第二種の認識」は比例数の規則を当てはめることによる。つまりこれも推論である。これに対して「第三種の認識」は推論を必要とせず、むしろ x を「第一の直観によって見る」(2/40/S2)といわれている。推論を必要としないということは、第一にその認識が予測という種類の認識ではないということの意味する。また第二にそこにはいっさいの操作が介在しないということの意味する。つまり与えられた認識から予測不可能なものが出てくるのをただ見届けることが「直観」なのである。このとき、われ

われの思考はその思考対象と一体となっている。いいかえれば、思考することがその対象を産出することになっている。したがってこの認識は「必然的に真である」(2/41/P)。

このように、「有限様態」の無限連鎖という問題を考察していくと、現実存在の次元とは異なると同時に、伝統的な意味での本質の次元(存在可能性の領域)とも異なる存在の次元が『エチカ』に固有の存在論を形成しているということが明確になる。その次元が「予測不可能性」の次元である。「直観知」という『エチカ』に固有の認識様式は、このような特異な存在論によってもたらされたと考えられるのである。

凡例

『エチカ』の参照箇所は以下の略号を用いて本文中に挿入する。

定義↓D 公理↓A 定理↓P 証明↓Dem 注解↓S

【例】『エチカ』第一部定理2↓1/25/P

使用テキスト Gebhardt(ed.) 1972. Spinoza Opera II. Heidelberg

注

(1) 「有限様態」の無限の連鎖が本当に「神の絶対的本性」から生じていると考えられるかどうかという点は解釈上の争点になっている。本稿はこの争点には入り込まず、「有限様態」の無限の連鎖それ自体が「無限様態」であり、したがって「神の絶対的本性」から生じているとみなすギャレットの解釈(Garrett 1991: 198)をひとまず真と仮定して議論を進める。ちなみに、ギャレットの解釈にはすでに反論が出ているが(Curley & Walski 2003)、その検討は別の機会に譲る。

(2) カーリーはそのような視点から定理28を解釈する(Curley 1988: 47-

48)が、それは誤りである。

(3) Epistola IX, Spinoza 1925: 43

(4) 上野によれば、スピノザが採用しているのはまさに後者の意味の定義である(上野 2012: 48-49)。秋保も上野の解釈を踏襲する(秋保 2015: 7)。ただし秋保によれば問題はその先にある。つまり真理に関わらないはずの『エチカ』第一部になぜ「真理」という言葉が現れるのかという問題である。実際スピノザは定理8注解2で「定理7の真理」(1/8/S2)に言及するのである。しかし、私の考えによればこの点はじつは問題ではない。書簡9の「真理」と定理8注解2の「真理」は意味が異なると考えればよい。書簡9の「真理」は現実知觉された対象を適切に説明する言語表現を意味しているのに対して、定理8注解2の「真理」は対象への指示を含まずたんに概念の次元で必然的に認識される内容を意味している。

(5) このような誤りはヨベルの解釈において明瞭に認められる。「自然法則は『エチカ』第一部定理28および『エチカ』第2部定理7という決定的な定理に含意されているが、前者は個別様態をつなぐ因果の連鎖を論じる定理であり、後者は全宇宙を支配する事物(および観念)の順序(ordo)と連鎖(connexio)を論じる定理である」(Yobel 1991: 81)。

(6) カントによれば「哲学的認識は概念による理性認識であり、数学的認識は概念の構成による理性認識である」(Kant 1990: 657; B71)。ところが概念の「構成」には「直観」が必要である。しかもそれは「非経験的」(Kant 1990: 657; B71)すなわちア・プリオリな「直観」でなければならぬ。

(7) スピノザのいう「帰結する」は「直観」を含まない「ア・プリオリな総合判断」のことでありと解することができる。ところで、カントに対する批判として、「直観」を含まない「ア・プリオリな総合判断」の可能性を主張したのはボルツァーノである。それは「概念のみにもとづく」(Coffa 1982: 685)総合判断の可能性である。ボルツァーノの主張は19世紀の数学における主要なテーマを予言している。「19世紀をとおし

てなされた数学的実践の発展が示唆していることは、ただ概念から推論するラッソ (reasoning) によって知識の拡張が可能であるという「ことである」(Machbeth 2008: 490)。¹⁾このように、スピノザの知識論をコメント以後の数学の哲学の文脈へと直すとかができるであろう。

(8) Hueneman 2003: 233

(6) スピノザが作図の例を用いるのはユークリッド『原論』の模倣であると考えられることができる。しかし、このことはむしろ、作図によって明らかにされる「包含」というユニークな概念の意味に注目すべきである。実際、この作図に関連して、上野はスピノザの「包含」の概念を「潜在的なもの (the virtual)」という意味に解している (上野 2011: 150)。コヌメンマン同様、「観念は潜在的に (virtually) 無限知性の本性のなかにある」(Hueneman 2003: 232) と述べている。「包含」を論理的な「含意 (implication)」とは異なる概念とみなさなければならぬというのがこれらの解釈の趣旨であろう。さらに、興味深いことに、スピノザ研究の文脈とはまったく独立に、ユークリッド『原論』における作図がすべてに「潜在的なもの (potential)」にかかわっているところの解釈 (Machbeth 2010: 26) がある。この点にだけ加えておくべきであろう。

文献

- ・秋保亘 2015 「スピノザ『エチカ』における定義の問題：実体の定義と真理概念を中心に」『哲学』第135号集 pp.1-24
- ・Coffa, Alberto 1982, "Kant, Bolzano, and the Emergence of Logicism," *The Journal of Philosophy* 79, pp.679-789
- ・Curley, Edwin 1988, *Behind the Geometrical Method: a reading of Spinoza's Ethics*, Princeton UP
- ・Curley, Edwin & Walski, Gregory 2003, "Spinoza's Necessitarianism Reconsidered," Rocco J. Gennaro & Charles Hueneman eds.,

New Essays on Rationalists, Oxford, pp.241-262

- ・Garrett, Don 1991, "Spinoza's Necessitarianism," Yirmiyahu Yovel ed. *Spinoza by 2000 volume I: God and Nature Spinoza's Metaphysics*, Brill, pp.191-218

- ・Hueneman, Charles 2003, "The Necessity of Finite Modes and Geometrical Containment in Spinoza's Metaphysics," Rocco J. Gennaro & Charles Hueneman eds., *New Essays on Rationalists*, Oxford, pp.224-240

- ・Kant 1990, *Kritik der reinen Vernunft*, Meiner
- ・Machbeth, Danielle 2008, "Logic and the Foundations of Mathematics," Cheryl Misak ed., *The Oxford Handbook of American Philosophy*, Oxford, pp.482-514

- ・Machbeth, Danielle 2010, "Diagrammatic Reasoning in Euclid's Elements," Bart van Kerkhove, Jean Paul van Bendegem, Jonas de Vuyst eds., *Philosophical Perspectives on Mathematical Practice*, College Publications 12, pp.235-267

- ・Spinoza 1925, Gebhardt ed., *Opera IV*
- ・上野修 2011 「決定論の彼方、自由としての必然：スピノザの場合（後日書き付け）」『西日本哲学年報』第15号 pp.145-160
- ・上野修 2012 「スピノザ『エチカ』の〈定義〉『マルター』200 pp.42-53
- ・Yovel, Yirmiyahu 1991, "The Infinite Mode and Natural Laws in Spinoza," Yirmiyahu Yovel ed. *Spinoza by 2000 volume I: God and Nature Spinoza's Metaphysics*, Brill, pp.79-96